

私のふるさとから考える明日の地域経済と将来の夢

大分県・大分県立日田高等学校 3年 諫山 美咲

基幹産業が存在しない限界集落において、農業は生活の糧を得る最後の術だ。自然を相手にすることは常にリスクを伴う。そのリスク管理に失敗すれば同じ栽培品種を扱い、互いに手助けし合いながら生産に携わっている集落全体の消滅につながる。農家が低金利の農機ハウスローンや農業近代化資金などの設備融資を受けることは必要不可欠だ。また不作に備え農業経営改善促進資金（スーパーS資金）などの短期融資なども積極的に利用されなければならない。金融面で農業しやすい環境をつくることで、若者の就農を助け過疎化を防いでいかなければならないと考える。

今日アジア・アフリカ諸国では世界経済の広がりにより沿岸工業地域が発展する一方、農村地域が貧困や過疎で悩む格差問題が大きくなっている。また工業化しつつある国と後発開発途上国との差が広がっている現状から、各国で「一村一品運動」の取り組みが多く見られる。この世界に広がる「一村一品運動」は、私の地元である大分県日田市大山町ではじめられた、地域農業を活性化させるためのNPC運動にその原点がある。

1961年大山町農協は町役場と一体となり米作には不適な山地の地理的特性を活かして、作業負担が小さく収益性の高い梅・栗を栽培し、さらに梅干等に加工して付加価値を高めるNPC運動を開始した。「梅・栗植えてハワイへ行こう!」というユニークなキャッチフレーズで知られたこの運動は地域農家の収益向上に貢献した。その後も大山町農協は1990年に全国の道の駅の先駆けとも言える農産物直販店「木の花ガルテン」をスタートし、2001年には地元産の作物を使ったバイキング料理レストランを木の花ガルテン内に併設オープンした。福岡市や大分市にも同様のレストラン併設農産物直販店を展開し、生産流通販売と飲食サービスを統一し、国内でも最初期に農業を第六次産業¹⁾化することに成功した。

1) 農業について、生産だけでなく加工・流通・販売なども統合的に取り扱うことで、事業の付加価値を高める経営形態。農学博士の今村奈良臣氏が提唱。〈大辞林第三版〉

人口3,500人の町(市町村合併前の町域)で、1,000万円以上の年収の農家は150世帯を超え、年収2,000万円の農家さえある²⁾ことは、過疎山村において特筆すべき事項である。

このような成功例をもとに一村一品運動は世界に広がりを見せ、タイでは金融のリンケージバンキング事業の一つとしてタイ版一村一品運動OTOP (One Tambon One Product)がタクシン政権下で行われた。BAACローンと呼ばれる農業小口融資が、地方活性化に大きな役割を果たしている。また台湾一村一品運動は政府經濟部中小企業処が推進する地方活性化プロジェクトとして地域産業の付加価値向上に取り組んでおり、アフリカ・マラウイではJICA主導の下、農作物を都市において販売するOVOP (One Village One Product)アンテナショップなど国家的活動が展開されている。このように世界に広がる一村一品運動であるが、原点となる大山町のNPC運動が地元住民の手で作り上げたボトムアップ活動であるのに対し、世界の一村一品運動は国主導のトップダウン方式で行われている側面が大きく、現状では中央政府などによる財政援助が欠かせないことに違いがある。また都市部にある販売店舗を通じた流通面での改革のみが現地の人々に期待されており、地域の独立を図り「人づくり」を主眼とした真の一村一品運動の理想が伝えられていない所が問題点とされている。³⁾

言うまでもなく一村一品運動で大事なことは、ものづくりではなく「人づくり」である。これは一村一品運動を全国に広げた当時の平松守彦知事が開いた「豊の国づくり塾」⁴⁾で盛んに提言された。当時大分県は九州の中でも所得が低い県であり、どの地域も過疎の進行と若者の減少に苦しんでいた。しかし一村一品運動を通じた「人づくり」の成果によって、大分県産品の知名度が高まり地場産業も活性化されることになった。

その原点である大山町(当時は大山村)のNPC運動は3期に分かれる。1961年に始まる第1次NPC (New Plum and Chestnuts)運動は所得を追求し、「米1俵増産運動」を提唱していた当時の国の政策に背き、村長であり農協の組合長でもあった矢幡治美氏を中心に、村全体で米作から梅・栗栽培に転換したことから動き出した。1965年に始まった第2次NPC (Neo Personality Combination)

2) 大山町農協「木の花ガルテン」店長中嶋氏に対する2011年8月21日の聞き取り。

3) 杉山世子氏の論文を参照。

4) 1983年に開設。大分県内を12の地区に分け、各地域に町づくり塾を設けた。テーマはそれぞれの地域が決める。2003年までに延べ1991名が卒塾し、現在も県下各地域のリーダーとして一村一品運動や地域づくり活動で活躍している。

運動は人づくりに重点をおき、ハワイ・中国・イスラエルとそれぞれ友好関係を結び、交流を盛んにし親交を深めた。その結果旧大山町は住民の70%以上がパスポートを取得し、全国で最も高い所持率となった。山村にありながら日本で最も世界に開かれた自治体となった。1969年第3次NPC (New Paradise Community)運動では、真の理想集落の形をイスラエルのキブツと呼ばれる集産主義的共同体に求め、若者が安心して定住できる町を目指した。NPC運動が目指したものは農産物そのものに加え、それを作り出す人々の心をいかに作り出すかにあった。ものづくりは人づくりであり、その町に住む人間の意識変化、人おこし運動こそが町おこしなのだ、と当時の大山町はすでに定義し実行していた。この考え方が県全体に一村一品運動として引き継がれたのである。

大山町はすでに過去50年にわたり、農業に携わりながらもサラリーマンと同じように月給制で、ボーナス支給があり、そして週休3日制が実現できる町を目指してきた。月給とボーナスに当たるような収入構造にするため、梅や栗など果樹からの収入は年2回のボーナスと考えられ、毎月の収入は天候に左右されず安定収入を得られるきのこ類への転換でまかなわれた。生産リスクを避けるため少量・多品種・高付加価値生産をし、毎日の出荷、収益率の向上により毎年の所得ベースアップを達成した。⁵⁾ 軽労働化のために大山町と農協は助成金を集中的に機械化や省力化施設に投入し、週休3日制の実現、そして老人になっても継続できる農業を目指して今日も取り組んでいる。大山町農協が運営する直営販売所「木の花ガルテン」の売り上げは平成2年には6,800万円にすぎなかったが、年々売り上げを伸ばし、平成5年3億4,500万円、平成10年7億3,900万円、平成15年13億6,000万円、平成21年15億5,900万円と一貫して右肩上がりになっている。⁶⁾ ここに50年を経て世界に広がる一村一品運動の原点である、大分県大山町のNPC運動は大きな成功を見せたように思われる。

しかしその町に生まれ住む後継者として、これから考えていかなければいけない課題はまだまだたくさんある。まず第一に、これまで行われてきた以上のリスク管理だ。第3次NPC運動が始まった1969年は梅の不作により収穫が9割減となった。ここで農家はNPC運動の当初から続けてきた梅栽培からの転換を余儀なくされた。現在の大山町農業の現実は一村一品という名目とはかけ離れた「一村

5) 山神進氏の文章を参照。

6) 今村奈良臣氏の文章を参照。

百二十品運動」と呼ばれるほどの多品種栽培を行っている。生産リスクを極力避け、日々新品種を開発している。これからも行われるその新品種の開発には、各農家での生産設備への投資が常に必要になる。このための金融サポートが継続して必要だ。

またどの町も避けては通れない農業の担い手不足のため、新たな就農者をつくる永住策が必要になる。これまで農業と関わりがない人の就農サポート（農機具・設備の購入、耕地・住居の確保）など、過疎地の後継者不足を少しでも緩和するため、各就農者にあわせた細やかなファイナンシャルサポートが要求される。近年は「道の駅」などライバルとなる大規模直売所が増えているため、長期的予測に基づいた計画を立てることが必要となろう。

私はこの町の後継者として、そのような就農ファイナンシャルサポートに従事したい。不作の年に就農をやめそのまま町を去ったり、跡継ぎなくリタイアする人を少なくしたい。年老いても生き活きと、いつまでもこの町で農業を行える環境を守っていききたい。豊作の次年の大不作で累進により高まった租税や、肥料・農薬・種代を払えなくなる農家、台風や冷害など自然災害による被害を被った農家をサポートし、チャレンジ精神ある就農者を応援できる人材となって、地域の活性化に貢献したい。そのために私は金融と経済を人一倍研究し、ふるさとと共に日本全体の地域発展を考え、一村一品運動の最前線である大山町で第4次NPC運動を起こし、若者が就農していく環境を生み出していきたい。

<参考文献>

- ・今村奈良臣「農業の6次産業化の更なる深化を見る(その3)―大分県大山町農協を訪ねた感慨―」2011年3月23日
URL <http://www.jc-so-ken.or.jp/pdf/head/column176.pdf>
- ・杉山世子「一村一品運動による地域振興と人づくり 大分県とマラウイの事例比較」慶應義塾大学2010年度卒業論文
2011年1月31日 URL http://web.sfc.keio.ac.jp/~llamame/wiki/index.php?plugin=attach&refer=%E6%88%90%E6%9E%9C%E7%89%A9&openfile=final_paper6_Seiko.Sugiyama.pdf
- ・山神進「一村一品運動の原点―大山町の米作から果樹栽培、きのこの栽培への転換の軌跡―」2007年3月
URL http://www.ps.ritsumeai.ac.jp/assoc/policy_science/143/14311yamagami.pdf

